

〔特別講演要旨〕

インプラントの病理

岩手医科大学歯学部
口腔病理学講座教授

鈴木 鍾 美

1991年10月18日

疾病や事故などによって生体の一部分が欠損した場合、その欠損部分の形態と機能を回復する方法の一つとして人工材料で修復するインプラントがある。

口腔インプラントは天然歯牙と同様の機能を果たすことを要求され、種々の材料で、かつ様々なデザインを持つものが開発されてきた。天然歯牙との最大の相違点は歯根膜の有無である。これまでの主たる関心は機械的強度、耐蝕性、生体親和性などの理工学的なものに向けられ、インプラントと組織界面については余り注目を集めていない。口腔インプラントが他の人工臓器と異なるのは、内部と外部の境界に存在し、感染と戦いながら機能しなくてはならない点にある。口腔インプラントで用いる材質は、整形外科領域のものと類似点が多いが、両者の間には閉鎖創と開放創のなかにおける治癒という大きな差がある。インプラントと組織界面を検討することは、今後のインプラント学の発展に重要なことである。高齢化が進んだ現在、歯科治療大系の中で、極めて重要な位置を占める時代が訪れている。

現在、種々のインプラント材料が種々の方法により臨床的に患者に行われており、インプラント材料とそれに対する生体の反応を理解する

ことは今後益々重要なことである。

大きく分けて骨内インプラントと骨膜下インプラントがあり、インプラント材料は組織為害性がなく、かつ組織親和性のあることが第一条件である。

インプラント材料と生体側の反応を病理学的立場から以下の項目について講演を行った。

1. インプラントの歴史
2. インプラント学implantology
3. 歯周組織の発生
4. 正常歯周組織の構造
5. 顎骨の成長発育
6. 創傷の治癒過程
7. 異物に対する生体反応
8. 歯牙移植
9. インプラントの適応
10. インプラントの分類（骨膜下インプラントと骨内インプラント）
11. インプラント材料の特性
12. インプラント材料に対する口腔粘膜と顎骨の反応
13. インプラント材料と骨界面構造
14. 骨組織による結合（osteointegration）

（文責：賀来 亨）